

ころでした。私は、「母ちゃん。帰ってきたよ!」と、一言だけ言って後は涙が出てくるだけで、大声を上げて泣き伏してしまいました。母も、「苦勞したなあ!」と、いつて土間にひざまずき、一緒に声を出して泣きました。そして、ときれときれに、「女の人で満州に行った人は、一人残らずソ連兵に連れて行かれた、という話を聞いて随分と心配していた」と繰り返して繰り返すので、親の有り難みをしみじみと感じて、また、涙が出てきました。母は話し続けました。兄が二人共戦死して、この間葬式を出したばかりということも話しました。全身から力が抜けて母にしがみつぎ、また涙がとめどなく流れました。

帰郷してしばらくたち、気持ちも落ち着いてきたころから、奥さんとの文通を始めました。子供たちも元気で学校に通っていることで安心しました。奥さんも働いているとのことでした。

あの避難行の中で、中島さんや長さんの援助がなければ、今ごろはどんなになっているだろうかと思像するだけでも、背筋にぞーっと冷たいものが走ります。

このお二人には、感謝しても感謝しきれないものがあります。

敗戦後の苦しみを思えば、どんなことにもぶつかっても生き抜くことができる、時々、自分自身に言い聞かせています。

過ぎ去った今、長かった、そして苦しかった若き日の満州での生活を振り返ってみるとき、あのこともこのことも、みんな懐かしい映像となってよみがえってくるのみです。

引揚げ苦勞の記

群馬県 富澤 マサ

一 渡満前後の思い出

大正五(一九一六)年十月、私は群馬県群馬郡群馬町の農家に生まれました。母親は、四十歳ぐらいのころに、身重の体で正月行事の「たこあげ」を見物に行き、冷えが原因で亡くなりました。姉十二歳、私は七

歳、妹が二歳のときでした。その後、父は後妻を迎えました。その継母は意地が悪く、私たち姉妹は散々泣かされて育ちました。やがて一人前の娘になり、早く家を出たいと思っていたところ、養子を迎えて家の跡取りをするはずの姉が嫁に行ってしまうました。

家に残る気のない私は、何とか外に出たいと願っていたところ、是非とも私を嫁に欲しいという方からの縁談話が持ちあがりました。その相手の方は、満州に行っているいとこの富澤義信でした。

母親を早く亡くして辛抱強く生きていた私を見て、満州に行っている息子の嫁にと、義信の父に望まれたのです。相手の義信は、明治四十三（一九一〇）年十一月、同じ群馬郡で農家の三男坊として生まれ育ちました。徴兵検査で陸軍の現役兵となり、二年間のご奉公をして除隊をしていました。当時、昭和初期ころの農村の暮らしは、どん底の状態でした。小作農の貧乏百姓の二、三男といえ、土地を分けてもらうことなどは到底不可能なことでした。

向こう意気の強かった義信は、七人の兄、姉、弟の

中の三男でしたが、除隊後には満州へ行って一旗揚げて成功し、満人の女でも嫁に迎えて、と考えて渡満する気になったそうです。

それに、満州の移民団に行けば三十町歩の土地をももらえるという話で、当時、内地の農村の二、三男にはまさに夢のような話だったので。そして昭和七年秋に、第一次武装移民として渡満、永豊鎮の群馬屯に入植したのでした。

義信との縁談は順調に進みましたが、その一方では、義信と一緒に満州に行った、群馬郡箕輪町出身の森山芳雄さんのところへ、義信の妹のよねさんを嫁がせることで話が進んでいたのです。そして、昭和十一（一九三六）年五月初めに、満州から「大陸の花嫁」部隊引率団長として帰国された、小倉幸男さんと奥様のさかえさんと共に、群馬県から大沢サダ、小川イセ、富澤よね、それに私の四人が花嫁に決まり、長野県やその他の県からの十数人の花嫁が一同となって、新潟港から船に乗り、まだ何も分からない未知の満州に向かったのです。ハルビンまでは汽車に乗り、そこ

からは松花江を船で下って、五月十二日、義信のもとに着きました。

その時私は二十一歳、義妹となったよねさんは十二歳のうら若い乙女でした。

二 永豊鎮群馬屯での生活

私の家は群馬屯第二組で、小川武雄、原田時次郎、森山芳雄、そして私共富澤義信の四軒でした。

昭和十三年六月ごろからは、弥栄村共励組合の農産物加工品販売の業務のために、佳木斯共励組合の出張所に勤務を命ぜられて、佳木斯の拓士会館に住んでいたこともありました。

満州に渡ると決まったときには、継母のいる実家には二度と帰らないつもりでしたが、開拓団生活が四年ほどたった昭和十五年五月の中ごろに、一時里帰りをしたことがありました。そのころにはお金にも少し余裕ができてきたので、それを持って両家の親にあげたところ大変に感謝されたものでした。

その里帰りで家を留守にしていたときのこと、どなたの家が火元かは分かりませんが、小川さんと原田さ

んの家が全焼するという惨事がありました。私の家と森山さんの家は幸いに焼け残ったのですが、部落全員の人が私の家も焼けるのではと心配してくださり、家を壊して家財道具をみんな搬出して防火をしてくださったそうです。家が全焼した原田さん一家は、一時、苦力クワリの家に住んでいましたが、第一組の田波さんの家の裏の畑が自分の土地だったので、今まで一緒に住んでいた第二組を出て、新築した家に住むことになり、それまでの仮住まいの苦力の家は、私の家の苦力に渡して行かれたのです。

小川さんは以前、匪賊の襲撃を受けたときに片手を負傷して不自由だったので、永豊鎮の弥栄駅の近くに住み、日本から続々と来訪するようになった視察団の案内役を務めることとなり、苦力が小川さんのところに住んで畑を耕作するようになりました。

昭和十二年十一月、私にも待ちに待った長男の信雄が生まれましたが、命はかなく十六年六月に病気がもとで亡くなってしまいました。その後、昭和十六年五月に長女の美代子が生まれ、さらに十八年二月には次

男文男が、十九年十二月には次女志津枝が生まれましたが、終戦時にはまだわずか八カ月でした。

主人のもとに嫁いで九年、平和で、豊かで、幸福な生活を過ごしていましたが、昭和十六年十二月八日に起きた戦争は、だんだんと激しくなり、ここ永豊鎮においても、世の中の情勢に不安を感じるようになりました。昭和二十年になると、男の人たちもあからさまに日本が不利だという話をするようになってきました。

昭和二十年四月二日の夜、思いもよらずに主人に召集令状がきました。初めは本物の赤紙ではなく、「模擬召集」かと思つて大して気にもしていませんでした。令状を持つてこられたのは、永豊鎮におられる小池久吾さんだったのです。「まさかか？」と思ひびっくりしました。

赤紙という言葉は聞いておりましたが、小池さんの真つ青な顔に驚き、「ああ！ 本物の召集令状なんだな！」と思うと、急に気持ちが落ち着かなくなりました。

入隊先がよく分からないので、明日永豊鎮の役場か警察に行つて入隊先を問い合わせることとなりました。当時の仕事は、山で薪作りや炭焼きをやらせていましたので、そのことや小作人の苦力のことなど、わずかな残りの時間では、どうすればよいのか頭の中はいっぱい、気が狂いそうでした。

翌朝、主人は永豊鎮の役場に行きました。その帰りを待つて、隣家の森山さんの家で盛大なる送別会が催されて、そのうえお餞別まで頂き、部落の人々に見送られて勇躍出征したのです。

このとき子供たちは皆小さくて、父親が兵隊に行つたことなど分かるわけありません。主人が出征した最初の夕食のときに、四歳半になっていた長女の美代子に、「父ちゃんが帰つてきてから、一緒にご飯を食べようよ！」と言われたときには、私は思わず目頭が熱くなり、ほろりとしました。

毎日、陰膳を供える私の姿を見て、どう思つていたことでしょうか。

群馬屯第一組の田波さんはとても早く召集されました。

たので、陰では、ご家族が本当にお気の毒だと思っておりましたが、田波さんに次いで早かったのが主人だったのです。初めのうちは、主人は看護兵だったので、それで召集が早いのかとも思っていましたが一週間後には、隣の森山芳雄さんにも召集令状がきました。そのころ森山さんは永豊鎮の役場に勤めていたのですが、森山さんの次男の潔ちゃんが、役場から帰ってきた父親に抱かれて家に入る様子を見て、「どうして、うちには父ちゃんが帰って来ないの?」と、我が家の子供たちは、うらやましそうに言うのでした。

そのうちに山川さん、中島さん、矢内さんと、次々に召集になり、男の人が少なくなり部落も寂しくなってきたと共に、恐ろしくなってきました。周りの満人たちにいつ襲われるのかと思うと、不安な気持ちでいっぱいでしたが、その反面、泣いてなんかいられないと気持ちを引き締めていました。

思い掛けずに急に召集になったので、何となく心残りがしているうちに、主人からの使りが届きました。その手紙は南朝鮮の済州島からでしたが、思えばその

地名のとおり最終（済州）、最後で、これで家族にも会うこともなく、自分も終わりかと思っただけ、手紙には、財産をまとめて内地に帰るようにと書いてありました。何と、それが最初で最後の一度きりの使りでした。

私の方から出した手紙に、「美代子が、父ちゃんが帰ってきてから一緒にご飯を食べようよ、と書いていた。」と書いたのですが、その文面には泣かされたと、後日、思い出して言っていました。そのころの手紙は、まだ検閲も厳しくなかったので、切り取られることなくよく読めました。向こうからの手紙には、日本が負けるとは書いてなかったけれども、兵隊でも腹のすき通しだとか、南瓜かぼちゃの干したのを送ってもらいたいなどと書いてありました。当時、ここでは南瓜がよくとれたし、とてもおいしかったので、いざというときのためにゆでて乾燥し保存食としていたものでしたが、それを送って欲しいとのことでした。それだけではなく、孟家崗の組合に行つて、配給品のタバコ、砂糖炒り豆などを、兵隊に送るからといって分けてもら

い、乾燥南瓜と一緒に送りました。しかし、これも一度しか送れませんでした。

家にいるときには、一日三度の食事しか食べたことのない人でしたが、軍隊に行つて腹をすかせているようでは、この戦争は負けるのではないかと思うようになります。今になってみると、そのときの手紙のとおり、財産をまとめて内地に帰ればよかつたと、つくづく後悔してなりません。そのような内容の手紙を内地へ出したら、みんな検閲に引つ掛かつて、切り取られてしまつていただろうと思います。

主人の両親は、昔の人でしたので、読み書きができない人でしたから、主人の妹が代筆して出していたのです。もう少し分かるようにと手紙には書いてありましたが、その家からの手紙もいろいろと切り取られて全部を読むことはできなかつたそうです。

内地ではB29による大空襲が毎日のようにあるとのことでしたが、当地は一度も飛行機など飛んできませんでした。家の周りの満人が、「日本は負けるよ！」と言っているのを耳にすると、本当に負けるのかしら

という気持ちになりました。負ければ、私たち女、子供は一体どうなるのだろうかと不安に思うようになっていくうちに、第二組でただ一人残つていた原田さんにもとうとう召集令状がきました。同じ日に中野さんも一緒に召集されました。中野さんがにっこりと笑つて出征して行かれた姿を、いまだに忘れることができせん。しかし、どこで戦死されたのか分かりませんが、中野さんはとうとう帰つて来られませんでした。原田さんは、前々から「一家の主あそびが留守になるほど兵隊にとられるようでは、日本も危なくなる」と言つていましたから、心の中で泣きながら出征されたことと思います。また、以前から、「家にはお金をたくさん置かない方がよい。二百円ぐらい残して、全部貯金しておいた方がいい」と言つていました。

近所の満人が嫁さんを迎えるというので、私は良い着物の上に着るビロードのコートを三千円で売つたことがあり、そして原田さんの言うとおりに、二百円しか残さずすぐ組合に貯金してしまいました。後で考えてみれば、そのお金を懐に蓄えておけば、避難して

からの道中で苦勞せずに楽に食べていけたのと思
い、後悔してなりませんでしたがすべて後の祭りでし
た。小川イセさん、中野アキさんは、避難する前々日
に飼っていた豚を売ったのですが、そのお金を全部、
懐に蓄えて出発したそうです。中野さんは、家族が大
勢で大変に苦勞して避難されましたが、途中で子
供さんを一人も犠牲にされずに帰られたそうです。

三 終戦前後の悲劇

八月十一日、我が家で雇っていた苦力を永豊鎮の組
合へ買い物にやったところ、もうそのときには佳木斯
からの避難が始まっていたらしく、苦力の言うことには、「駅は回家、回家（家に帰るという意味）」で、日
本人が多々（たくさん） 哭了（泣いている） して「い
た」と言って帰ってきました。話は本当のことのよう
なので、私も恐ろしくなりました。男性がほとんど召
集されてしまった部落では、もしも本当に日本が戦争
に負けることになったら、私たち女、子供は一体どう
なるのでしょうかと、泣き声をあげながら話し合っ
ていました。

群馬屯は四戸一組でしたが、部落の中で点在してお
り、各組は一〇〇〜二〇〇メートルぐらい離れていた
ので、「いざ!」というときにはお互いの連絡などは
思うようにはまかせないと考えると、とっても不安で
した。

とうとう心配していたことが、八月十二日の夜に起
こりました。三組の糸井さんの家に青島（チンタウ）から六月中旬
ごろに疎開してきていた久保田さんが、我が家に見え
て、「今八時ですが、十時までに米一斗を持って駅に
集まるように」と連絡に來られました。久保田さん
は、二組のすぐ近くに住んでいたので早く連絡にきて
くれましたが、義妹の森山よねさんの家は隣だったの
で、二軒一緒に一度で用が足りました。

私の家の米を一斗持たせて一緒に家を出ることにし
ましたが、それからが大変でした。四組から七組まで
は小見欽吾さんが連絡に回られました。小見さんは海
軍の軍人さんでしたが、乗る艦が無いので召集令状が
來ず、群馬屯に残っていた数少ない男性でした。

再びここに戻って來られるだろうか? と思いが

ら、とにかく一応避難する準備をしていると、我が家の雇人だったゴータイという名の苦力が、「奥さん、逃げるなら良い物を持って出た方がいいよ」と言うので、荷物に入れ替えをしていましたところ、もうこのときには、近所の満人たちが土足のままで家の中に入り込み、小川さんの家の雇人たちは、綿入れや、たんすから時計を全部盗んで逃げて行ったのです。彼らのうちの一人は、時々我が家でも雇っていたので、この家には何が、どこにあるかはよく知っていたのだと思います。私はまだ衣類やその他、いろいろと避難準備をしていたので頭がいっぱい、時計のことまでは気が回らないうちに、めぼしい物は全部持っていったし、まいりました。私も時計は必要だと思つたのですが、持つて行くなどとは言えませんでした。自分や子供の命さえも危ないのですから、何か言えば相手は何をするかもわからないので、欲しい物は黙って持ち出させました。我が家の使用人の苦力も、主人の一番大切な上物のオーバーを出して着ていました。この男は長年にわたって働いてくれていましたので、世話になったと

の思いから黙って与えましたが、彼はこれを着て駅まで送ってくれました。

八月十二日の時間も大分経つてから、米一斗と、行李三個に最小限の荷物を詰めて、我が家の馬車で森山家の家族と一緒に孟家崗の小川さんの家に行きました。小川さんは前から駅の近くに住んでいましたので、そこまでは馬車で荷物を運ぶことができました。

しかし、小川さんの奥さんに、「富澤さん、そんなにたくさん持ってきても、みんな自分のことだけで精いっぱいなんだから無理よ！」と言われて、主人の防寒着を身につけ、二枚続きの毛布を一枚と蛇の目の傘一本を持ち、さらしの負い帯にポプリンの洋服生地一反を身に巻き付けて、そのうえ当座必要とする薬を持ち、リュックサック二個に詰め替えました。子供は二人一緒に背負つたのですが、小さい方がつぶれてしまいそうになるので、文男を後ろに、小さい方の志津枝を前に抱き抱えるようにして、リュックサック二個は私の首にぶら下げ、傘と毛布は子供の頭の上に乗せて、長女の美代子には誕生日のお祝い着と、重ね着の

振り袖を雑のうに入れて背負わせました。八月上旬の真夏の暑い盛りでしたが、暑いなど言っていはいられませんでした。

駅の近くには旅館があったのですが、もうそのころには満人が、われ先にと物取りに侵入していて銃での殺し合いが始まっていました。死体がばらばらと音を立てて落ちて来るのを目の前で見て、身の毛のよだつ思いをしました。駅までは、ゴートイに送ってもらい列車の来るのを待ちました。

そのうちに、佳木斯の方からきた列車には、日本の兵隊さんがいっぱい乗っていて、口々に、「頑張れ！頑張れ！日本は絶対に勝つぞ！」と言って、手を振っていました。こちらのみんなで、「万歳！万歳！」と叫びながら別れました。

駅まで送ってもらって一緒に列車を待たせていたゴートイに、おなががすいたので握り飯を作って来るように頼んだら、部落まで戻って丸く大きいおむすびをたくさん作って届けてくれました。今度はゆで卵が欲しいと頼むと、また、たくさん作って持ってきてく

れました。そんなこんなしているうちに、これから先の食事のことを考えると、煮炊きをする道具が必要だと考えて鍋と飯盒を持って来るように頼んだが、これはとうとう間に合わず残念でなりませんでした。ゆで卵が欲しいと頼んだときに、ゴートイは、「ご主人は逃げられるが、自分たちはどうなるだろう。大鼻子グアビーズ（鼻の大きいロシア人）がきて連れていかれるのでは？」と言って、泣きながら別れを惜しんでくれました。

夕方まで駅で待って、ようやくきた列車は屋根の無い無蓋車でした。おおよそ、部落別に乗り込みましたが、ぎゅうぎゅうと詰め込まれ、横になって寝ることもできないありさまでした。子供たちはみんな、今起きている状況が分からないので、ただ苦しさに泣き叫ぶ乳飲み子や暴れる子供たちで、列車の中は大変な騒ぎでした。

翌朝、佳木斯駅に着きましたが、夕方になるまで列車は動きませんでした。やっと日が暮れるころになって動き出しましたが、このころから雨が降り出しまし

た。無蓋車なのでどしゃ降りになってきた雨に、少しでもぬれないように持ってきた毛布などを出し合ってみんなに掛けてやったのですが、用足しに出たり入ったりしているうちに、どうにも厄介となり雨よけの役に立たなくなり、後ろの方へまとめてしまいました。

私は、持ってきた傘一本で随分と助かりました。

南又に着いたころには、雨もやみしばらく停車していました。その際にたき火をしたので、ぬれた衣服を乾かすことができました。ぬれた衣服を着替えたり、乾かしたりした人はよかったです、そのまま着ていた人の中には、風邪にかかりそれがもとで死んでしまった幼子がたくさんいたのです。

ようやく南又を出発した列車は、間もなくソ連機の襲撃を受け、危険だから列車の下に隠れるようにとの伝言があり、こうなったならば、子供もろともに死んだ方がましと、隠れませんでした。

何日か列車に閉じ込められた後に、たどり着いたのは緩化の駅でした。ここで列車から降ろされて、長時間歩きや々と着いたのが飛行場でした。もうみんな疲

れ果てて歩くのがやっとの状態でした。我が子も、よろめきながら後ろについて歩いていました。それでもまだこのときは、部落を出て避難を始めてから日も浅かったので、老人や子供の犠牲者は少なかったのです。

緩化の飛行場に到着して、案内されたのは格納庫のようなどころでした。夜着いて、真っ暗やみの中を連れて来られた板張りのところで、疲れ切った体を横たえて一夜を明かしましたが、朝起きてみたら昨日まで背負ってきたリュックサックの中にあつたはずの着物が無い。さては盗まれてしまったかと思っていたら、同じ群馬屯の矢内さんが返しに来られました。矢内さんは、家を出るときにあまり衣類を持たずに逃げてきたので、申し訳ないと思いつつも、夜になり寒さが身に堪えてきたので、私の持っていた大島紬の着物を借りて休んだと言って、謝りながら返しにきたのでした。そのときははっとしましたが、これらの物も、後にはみんな盗まれて無くなってしまいました。

翌日の朝、多分八月十六日のことだったと思います

が、二人連れのス連兵が物取りに回ってきたときには、みんな下を向いて子供が泣き出さないように口を押さえていました。そして次の日も、またその次の日も、ス連兵が時計や皮バンドや万年筆などを手当たり次第に取りあげて行きました。ス連兵の横暴ぶりは目に余るものでした。

綏化でのある日、群馬屯で召集された矢島さん、田中さん、田村さん、林さんの四人が線路を歩いて牡丹江から戻ってきたので、部落全員がほっとすると共に、気も大きくなり心強く感じたものです。その人たちの話で、八月十五日に、とうとう日本が本当に負けたということを知りました。そのときは、言葉もなくぼう然としてしまい、これでもう家には帰れないのだと痛切に感じました。無事にここまで帰ってきた四人を見るたびに、主人は一体どうしているのかと心が痛んでくるのでした。

四 綏化から大連に向かう

この綏化の飛行場には、何千人という避難民が収容されていきました。悪い環境のため、しばらくすると、

飢えと寒さから体力の弱っている老人や幼い子供が大勢亡くなりました。私の家族でも、ここまで何とかして元気に連れてきた志津枝を、八月三十一日に亡くしました。不幸中の幸いというのでしょうか、まだ早い方だったので、お棺になるような箱もあり、それに納めて本多先生の奥様にお経を上げていただき、夜が明けきらないうちに葬ることができました。周りの人たちにお悔やみまでしていただき、とても有り難いことでした。そのときはまだ、家から持ってきたねんこや毛布の襟巻などがあったので、それを敷いて葬ることができました。美代子と文男は朝起きると、「志津枝ちゃん、どこに行ったの?」と言って捜し、とても悲しんでおりました。一週間ぐらひは、線香もなしにお墓参りにも行けたのですが、そのうちに満人が押し寄せてきて行けなくなりました。小池さん、森山さん、山川さんの子供さんたちも、同じような時期に一緒に亡くなり、むしろのような物に包んで葬ったとか。また、真っ黒くなった石油缶に納めて捨てるようにして葬った人もあったとかで、誠に惨めな状況でし

た。そのうちには、埋葬した場所にも危険で行けなくなってしまう。

まだ幼かった美代子や文男は、親の私がいたからよかったです。親に先立たれて残された子供さんは、惨めでかわいそうなものでした。食べ物さえ十分にあれば、みんな生きて帰れたのですが、そのころは、自分たち親子だけでも生きていくのに精いっぱいでした。

九月になると、朝晩とても寒くなってきましたが、着る物も無く、このままここにどまっていたら凍死する者も出るだろうという心配から、南の方に移動できるようお願いしていたところ、ようやく九月中旬になって大連に行けることになりました。出発の前夜、小山さんの家族がとても悲しんでいるように見えたので、末っ子の留吉さんが亡くなったのではないかと思います、すぐ近くで寝起きをしていた私は、慰めの言葉を申し上げようとしたら、小山さんは、「まだ生きてはいるけれども、今、ここを出発すればすぐ死んでしまうだろうから、かわいそうだがここに置いて行く

うと主人が言うのです」と、泣きながら話すのでした。避難のために移動するという切羽つまった事態では、致し方ないこととは思いますが、しかし、とんでもないことでもあります。山川イチさんが、「私も後悔やみに行かなければ」と言うので、留吉さんはまだ生きているからと事情を話しました。

また、小山竹治さんの家では、ご主人が、「荷物はたくさんは持てないから捨てて行け」と言ったとかで、それを悲しんだ奥さんが泣いていたというようなこともありました。

次の日、出発後間もなく、留吉さんは列車の中で亡くなったので、列車が止まるのを待って線路の横に葬ってきたそうです。とても気の毒で、家族の方々に声のかけようがありませんでした。

緩化を出発するときに、残り少なくなったお金の中から五円を奮発してリンゴを買い、親子三人で食いつないで過ごしてきました。大連へ向かっている列車は、停車場でもないところで時々停車するのです。すると、暴民の襲撃が始まります。私は運よく貨車の真

ん中にいたので助かったのですが、小川さんは窓際にいたので、一番早く毛布を取られてしまいました。最初のうちは時計、皮帯、万年筆など、金目のものを手当たり次第に盗んで行ったのですが、そのうちに毛布や衣類など何でも取っていくようになりました。こんなところで取られるようなら、家の周りの満人たちにくれてやった方がどんなによかったろうかと、しみじみと思いました。

列車が途中で止まったときに、鉄橋の下を流れている、真つ青なこけが生えている川の水を満人が売っていました。ひもで下げたサイダー瓶一本を二円払って買いました。のどが渴いているので無我夢中で飲みましたが、本当においしかったです。別に体にも異常はありませんでした。

もう暴徒に襲われても、何も取られるものはありません。暴徒が来ると全員で、窓が割れるような大声を出して叫んだり壁をたたいたりして騒ぐので、やつらは列車の中に入ることを諦めていました。糸井さん方に避難していた下川さんの子供さんが列車の中で亡く

なりましたが、深い川でないとお見送りができないので、そのまま貨車の中に安置していましたが、やっと大きく深い川に差し掛かったので、厚い綿入れのねんねこにくるんで流し葬りました。深い川に流さないと、着せた衣類をはぎとられてしまうからですが、後で考えてみればかわいそうな吊い方であったと、泣けて泣けて仕方がありませんでしたが、これもやむを得ない方法だったのです。

緩化を出て十日ほど列車での悲惨な旅を続けて、ようやく大連にたどり着きましたが、ここで引揚船に乗れるまでの一年三カ月あまりの収容所生活は、今までに経験したことも無いような苦難と忍従に満ちた日々でした。

五 大連での難民生活

大連に着いたときには、腹がへってそれこそペコペコでした。そんなときに、矢内さんの奥さんにトウモロコシの粉で焼いた煎餅せんべい（薄焼せんべい）を買ってもらい、本当に命拾いをしました。

小川武雄さん、小林賢治さんは、大連にきてから大

工仕事を見つけて働きに出ましたが、仕事先の家は三上さんという家でした。小川さんが、乳飲み子を亡くした人がいるという話を話したらしく、私に、「乳母として子供連れでもよいからきて欲しい」ということで、三上家に住むこととなりました。三上家にも、美代子、文男、志津枝と同じぐらいの年齢のお子さんがおりました。三上さんの奥様は、四十二歳で後妻さんでしたので、母乳の出る人が欲しかったのだと思います。そのようなことで三上家に住み込んだので、その後、原田タケさんや小林賢治さん、糸井さんの奥さんなどが亡くなったことも知らずに過ごしていました。小川さんが時々この家に来るので、やっと様子を知らされた次第です。

乳母といっても、栄養のあるおいしい物でも十分に頂いていけば乳も出るのですが、栄養不足でよい乳も出ないので、お子さんの発育も良いというわけにはゆきませんでした。朝から晩まで働き通しでした。あるときには、お腹がすいて高粱を煮た釜に残っている「御粘おねり」の中に、正油の「諸味」を混ぜて飲んだり、

飼犬のえさまで食べて空腹をしのいだりしました。犬の方がやせ細ってしまい、私は恥ずかしい思いをしたこともありました。

三上さん一家はクリスマスチャンだったので、私の子供たちも皆かわいがっていただきました。一週間に一度はお風呂にも入れていただきましたが、私の子供たちまでも、ご主人と一緒に入れて体を洗ってください、有り難く感謝の気持ちでいっぱいでした。私たち避難民のだれもが一番困っていた虱を、三上さんの家族にも移してしまい恥ずかしい思いもしました。食料品はたくさん買い込んで蓄えてありました。この戦争による混乱が何年続くか分からないという考えがあつてのことだったそうです。三上さんの家族五人、それに知り合いの用心棒的存在の二人、私たち親子三人の合わせて十人の大所帯で、高粱三合にウズラ豆一合を混ぜてお粥にして一食としていました。これではとても、満腹にならず、食べたあとからすぐに空腹感が襲ってききました。けれども、栄養価のあるものを一日一回は必ず食べさせて頂いたので、私も子供も寒さの一番敵

しい昭和二十年十一月から二十一年の二月までを無事に過ごすことができたのだと、感謝するばかりです。

そのうちに、小川さんから、「弥栄村の仲間の人たちも、今はみんなが満人やロシア人のところに働きの出て、賃金や食べ物をもって生活している」という話を聞き、寒い冬の四カ月間お世話になった三上さんの家を出て、収容所に戻りました。

ところが、戻って間もなく私は発疹チフスにかかってしまいました。栄養状態が良かったために入院もせずには治りました。本当に運が良かったのだと思います。

同じ二組だった原田タケさんは、宗雄、操、千恵子、照雄という4人の子供を連れて避難してきましたが、大連にたどり着くまでに一人、大連に着いてから二人を亡くして、この冬を越してから、タケさんも亡くなりました。一人残された長男の宗雄さんは、タケさんの兄さんの小林賢治さんが引き取りましたが、その小林さんも亡くなってしまい、小林さんの奥さんの世話になっていましたものの、同じような年ごろのい

とこが四人もいたので大変だったことと思います。当時、九歳ぐらいだった宗雄さんは、朝早く起きて満人街に行き、ドッカン豆（爆弾あられのこと）を拾って食べていたそうですが、満腹になるほど落ちていたわけではありません。小林さん一家は弥栄第六組でしたので、私たちと同じ場所ではなかったので、世話をしなくてはあげることができませんでした。宗雄さんは、時々満人街で満人にかわいがられて家に帰って来ないことがあります。みんなを心配させていたようです。

また、佐野さんの奥さんも発疹チフスで亡くなり、子供の秀治、儀行の二人の兄弟が残されましたが、ご主人は永豊鎮で召集されたままで、生きているのかどうかも分からない状況でした。同室の皆さんが、回り持ちで食事やその他の面倒を見ていましたが、時々、満人が収容所にやってきて、子供を欲しがっていたのですから、もしものことがあったらと心配していました。佐野さんが無事に戻ってきて、子供さんのことを知ったならばそれこそ大変だということ、小山さんの発案で、内地まで何とか無事に一緒に連れて帰

国することにしてみました。

六 いよいよ帰国

永豊鎮群馬屯から避難してきて、食べる物は乏しく、着る物も無い、一年四カ月の難民生活を過ごしていましたが、ようやく引揚げが開始されて、私たちも準備を始めました。

昭和二十一年十二月の初めに、引揚船が大連港に入港し、待望の乗船となり、やっとの思いで日本の本土に帰り着くこととなりました。親を亡くした子供たちも、みんなが力を貸しながら無事に連れて帰りました。

原田宗雄さんは、伯母の小林さんが一緒に連れて帰国し、佐野さん兄弟は、小川武雄さんが高崎市の実家の叔母さんのところへ送り届けたそうです。

この引揚げ逃避行で、娘一人を亡くした私の悲しい旅もやっと終わったのです。

佐世保から群馬県の実家に、子供二人を連れて帰り着いたところ、何と主人は先に帰国していて、私の実家で働いていたのです。永豊鎮で召集されて入

営、間もなく本土防衛の一員として朝鮮の済州島に転属になりましたが、ここで終戦を迎えたそうです。昭和二十年十一月に佐世保に上陸し、故郷に帰り着いたのですが、主人の実家は家族が大勢で生活も大変なので、私の実家の方に招かれて、満州から帰って来ない帰って来ないと首を長くして待ちながら、実家の仕事をしていたとのことでした。考えてみれば何とも哀れな満州開拓一家の結末でした。

七 引揚げ後の生活

私の実家は妹が跡を継いでいたので、しばらくは主人と共に世話になりました。農村でも終戦後は食料事情など決してよくはありませんでしたが、みんなの好意に甘えていました。家は二棟続きの一棟で、片方の一棟には、本家の親類の東京からの疎開者が住んでいました。毎日の食事は実家でみんなと一緒にでした。実家は、田圃が一町三反それに裏作として大麦小麦を作付けしていました。そのほかに桑畑があって養蚕もしていて、主人と私がそこを手伝いました。実家では、「田圃を二反歩ぐらいやるから、もうどこにも

行くな」と再三言ってくれたし、役場に勤めなにかという話もありましたが、主人は妻の家の世話になったり、番頭のように使われるのは嫌だという気持ちから、満州時代の友人と青森県下北半島の野辺地開拓地や、群馬の上高地、利根郡の新治村など方々の開拓用地を見に歩いていました。その後、群馬県庁に行き、吾妻開拓地は土地が肥えている、一戸に三町歩ぐらいの払い下げがある、などの話を聞き仲間と合意して、現在の吾妻開拓地に入植することになりました。矢島、原田、森山、星野、大沢、林、富澤、その他満州時代の仲間十二軒で吾妻弥栄を作り、満州弥栄群馬屯の再建を目指しました。

初めのころは大変でした。木の根を掘って燃やしましたが、それでも大きな根はいつまでも畑の中に残り作業の邪魔でした。大豆、小豆、もち、馬鈴薯、甘藷、陸稻など、いろいろな作付けをして苦勞をしました。

あれからもう五十年がたちました。その後酪農に転換し、今では乳牛一筋で搾乳牛が三十頭くらいいま

す。畑は野菜少々のはかは全部青刈り蜀黍の作付けです。

主人は昭和六十二年十月に七十七歳で亡くなり、今年十三回忌を迎えました。私は八十三歳になりましたが、まだまだ元気に子供たちと一緒に暮らしています。

昨年三月に、群馬県磯部温泉で、「満州群馬弥栄会」がありました。そのときに佐野秀治さんに会い、お母さんにそっくりの顔で思わず、「秀治ちゃん！」と呼びかけて、「おばちゃんを覚えていてるか？」と聞きましたが、全く覚えが無いという返事でした。一人だけだったので、「弟さんは？」と聞くと、一カ月前に亡くなったという返事でした。やっと内地まで無事に帰れたのに残念なことでした。お母さんの話をする、私に、子供のように抱きついてきて、大声を出して泣き出しました。私も一緒に泣いて夜の更けるのも忘れて語り合いました。

最近次々と皆さんが亡くなり、元氣なのは私一人です。小川イセさんも、元氣とはいえませんがまだまだ

大丈夫だそうです。磯部温泉での集まりのとき、藤巻さんに会いましたが、藤巻弥栄病院長さんの息子さんであることが一目で分かりました。先生には大変お世話になったことを話しますと、父の話が聞けたと言つてとても喜んでくださいました。

五十年前の悪夢の思い出のためか、思うように筆が進みませんでした。

二度とこのような悲劇を繰り返さないために、私の書いたこの手記が少しでも役に立てばと願うばかりです。

敗戦と女の涙

東京都 林 田 佳 子

一 あこがれの満州へ

勤労奉仕隊員として、夢にまで見たあこがれの満州行が実現できたのは、戦火たけなわとなった昭和十九(一九四四)年三月の末でした。

親友三人と共に群馬県からの参加でしたが、一週間分ぐらいの食糧として、おにぎりを焼いたり油で揚げたりした物を作り、リュックサックに詰め込み背負いました。

内田場長に引率されて、多くの人々に見送られ歓呼の声の響きわたる中を、富岡駅から出発しました。車内は軍の命令で、途中車窓から外の景色が見られないように木製のブラインドが下ろされていました。

新潟港に着きそこで一時休憩の後に、朝鮮行の連絡船に乗り船底の部屋に入れられました。初めての船旅のうえに、船底部には異様な悪臭が充満していて、眠ることもならず苦しみ抜いての二泊でした。やっこの思いで清津に上陸し、今度は汽車の旅となりました。

清津から羅新へ向かう車窓からの眺めは、故郷の山々の緑溢れる風景とは全然違って、赤土のはげ山ばかりが続いていました。目に入る町々の看板には朝鮮文字ばかりが書いてあり、何が何だか分からず、やはり異郷に來たのだということをしみじみと実感しました。

朝満国境を越えていよいよ満州国に入り満鉄列車と